

偶成

横井小楠

東海とうかいの波濤はとう北越ほくえつの雪ゆき

飽あまでまで光景ひょうけいを看みて百觥ひゃくこうを傾かたむく

十年じゅうねん限り無なし風塵ふうじんの客かく

故山こざんに帰臥かきして雨声うせいを聴きく

【作者】横井 小楠(一八〇九〜一八六九年)熊本の人。名は「時存」(ときあり)。字は子操。号小楠。通称平四郎。江戸昌平黌に学び、

天保十一年熊本に私塾小楠堂を開く。嘉永四年(一八五二)、諸国を遊歴。開国通商、殖産興業を主張。福井藩松平春嶽の政治顧問として活躍。幕政にも参画した。雄藩連合を策し、攘夷派の一掃を図って失敗し、刺客を逃れて帰国、抵抗せず逃れたことで土籍を剥奪され閑居を命じられたが、閑居中も倒幕派に影響をあたえ、維新後登用され参議となったが、攘夷過激派に路上で殺された。六十歳。長岡是容、元田永孚、橋本佐内、坂本竜馬ら親交があった。

【語釈】*東海波濤：奥州二十五藩を盟主として薩長軍と戦うこと。 *北越雪：越後長岡牧野藩を中心として、七藩が奥州軍と同盟し、

薩長軍と戦うこと。 *看光景：形勢ををみる。 *觥：杯。牛の角でつくったさかづき。

*風塵客：動乱の中に生きてきた自分。 *帰臥：帰省して休む。 *故山：故郷。

【通釈】維新の東北、北越戦争がおころうとするとき、故郷熊本に帰り、ひっそり暮らしている心境を詠じた作。

東北や北陸方面では、戦争がはじまるそうな気配であるが、自分はこの動乱に十年も奔走したのだから、いまは、故郷に帰り、世俗を洗い流し、杯をかたむけたり、雨の音をきいたりしながら、ひっそり暮らしているのである。